

美里町における文化遺産の野外博物館化を目指した調査について

熊本大学 学生員 ○尾中俊平 熊本大学 三澤純

熊本大学 正会員 山尾敏孝、柿本竜治 美里町 水上仁

1. はじめに

昨年、文化的景観として人々と自然が共生する景観地や風景の保存・活用が可能になった。そこで本研究では、町自体が文化財保護と保存・活用に積極的な美里町を選定し、街づくりの第一歩として野外博物館化を計画した。野外博物館とは活用できる野外展示物として整備することで、歴史と自然が共生する文化のある街づくりを提案するものである。価値を再発見・再評価し、最終的には、地域に身近なもの・大切にしたいもの・受け継いでいきたいものを伝承し、住む人と訪れる人にとって魅力的な町にするための一助になればと考えている。

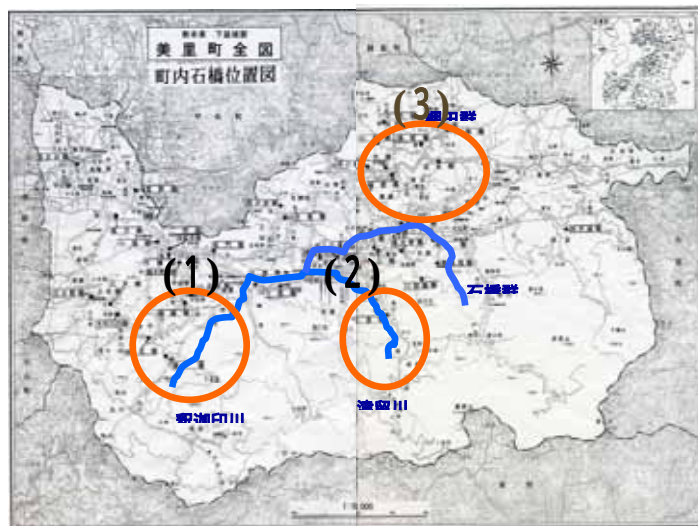


図1 美里町の調査対策地域

左図) (1): 釈迦院川を中心とする地域
(2): 津留川を中心とする地域
(3): 棚田のある地域



写真1 美里町の風景の一例

2. 調査目的と内容

まず、文化遺産とは「身近で大切な、伝えていきたいモノやコト」と定義し、博物館の要素はすべて文化遺産とする。美里町は熊本県下益城郡にあり、多数の文化財があるが、今回はこの中で歴史的に価値のある土木遺産・建築物・景観、用水路や石碑や風景を取り上げ、対象とした。しかし、土木構造物や建築物は大幅な改修が加えられたり、放置がほとんどで、景観地も同様な状況である場合が多い。そこで、美里町に存在するこれらの文化遺産を調査した結果、表1に示すような3つの特徴ある地域が存在することが分かった。図1の(1)~(3)に相当するものである。本論文では、特に棚田がある地域(3)の特徴や現状を述べることにする。



図2 棚田のある地域の詳細図

表1 調査地域別の特徴

(1) 釈迦院川地域	(2) 津留川地域	(3) 棚田地域
水路が上流で分かれている。岩野用水という水路は、技術的にも火薬を使って造られており、珍しい手法として価値がある。現在も農業用水路として活用されている。北に行くと江戸後期から明治に作られた寺社や寺院が30以上ある。石橋も数多く、水路のそばに造られ、今も活用されている。南に下ると小規模の棚田があり、十分ではないが管理されている。	上流部分は盆地からの景色(写真1)がよく、休憩場所も確保されている。民家の横を水路が流れ、昔ながらの蔵もある。人と水路が共生する町並みである。東側に石橋の水路橋である雄亀滝橋があり、町の用水路として現在も管理、活用されている。水路とともに遊歩道も確保されており、徒歩で移動することが可能である。	開放的な棚田と閉鎖的な棚田の2種類があり、室町時代から続く歴史的に長い棚田である。棚田や民家に使われている石垣や、頂上から見下ろす景色がよい。頂上には昔に建てられたと思われる小屋があるが、何のために建てられたかは分かっていない。他にも、小規模の石橋が周辺にあり、管理されている。

調査内容は、文献による資料収集と現地での状況を把握するための写真撮影を主とする現地調査である。図2は棚田のある地域の拡大図である。緑川を挟んで、2つの棚田があるが、川沿いの道路は非常に狭く交通の便が悪い。南方向に津留川を中心とする地域があり、南西に釈迦院川を中心とする地域がある。

3. 調査結果と考察

棚田の特徴は表1に示すように2種類の棚田があることである。開放的な棚田(写真2)には看板も設置され、頂上には当時の様子を記す石碑がある。棚田の数も多く文化的景観として優れている。閉鎖的な棚田(写真3)は周囲を林に囲まれている部分も多く、規模も小さい。2種類の棚田は今も人と共生し、歴史的価値も高いことから、町の魅力的な要素として取り入れるべきである。他にも、石碑や昔の祭られていた小屋もあった(写真4、5)。石碑から昔の情報が分かるのだが、今まで調査されていないようであり、消えかかっている。一般の人には何が書かれているかは分からず、小屋の説明もされていない状態である。今までは土木遺産、建築物あるいは石碑等の分野ごとに調査はされてきたが、それらをまとめて評価し利用することは検討されていないのが現状である。

現状はアクセスが悪く分かりにくい点が挙げられる。また、道の途中に案内の看板が立っているが分かりにくい場所にある。石垣は棚田(写真6)や民家の土台(写真7)に使われており、人と自然と文化的景観が融合した空間であるが、棚田や石垣ではなく、周囲の空間の整備・改修が必要だと思われる。そうすることで、より魅力的で親しみやすい空間が生まれると思われる。



写真2 開放的な棚田



写真3 閉鎖的な棚田



写真4 棚田頂上の石碑



写真5 棚田頂上の小屋



写真6 棚田の石垣



写真7 民家の石垣

釈迦院川を中心とする地域は、水路が現在も使用されており、160年間も維持管理されて機能している。ここは水路が目立つ地域である。しかし、水路と石橋がコンクリートで埋められているものがあり、歴史的価値のある文化遺産を軽視した改修が行われている。下流から南にある棚田も使用されているが、管理が十分されていない。

津留川を中心とする地域は、昔ながらの風景や自然と民家の共生する空間が主である。歴史的に古い蔵が民家があり、室町時代にこの地(写真1)を治めていた人が造らせた石碑が今でも残っている。碑文の内容は確認しにくい、石碑用の紹介看板を設置して文化遺産の再発見に活用したい。水路は雄亀滝橋まで続いており、非常に規模が大きい。

各地域において、調査や文献、測量や資料収集などから本研究を行った。それぞれの地域で主となるものと指定・未指定にかかわらず、周囲の要素を関連して調べ、地域別に大きく分けて3つにまとめた。今後の課題は、上記3地域について野外博物館化するための展示物である文化遺産の特性をより詳細に調査し、価値評価を行なう予定である。

参考文献

- 1) 太宰府市；大宰府市まるごと博物館基本計画，pp1~16, 2002.6
- 2) (社)日本建築学会；景観法と景観まちづくり，学芸出版社，pp136~139, 2005.5
- 3) 熊本大学文学部日本史跡研究室；下益城郡美里町中央町地区金石文遺物調査報告書 -石は語る，pp8~45 2003.3
- 4) 熊本大学文学部日本史跡研究室；下益城郡美里町中央町地区金石文遺物調査報告書 -石は語る，pp4~22 2005.3.25